

末黒野

すぐろの

6月号
(通巻922号)



春の星

森清堯

薄氷やジグソーパズル解くやう
料峭や母居ぬ庭の荒れ果てて
ストレッチャーに付きゆく廊下冴返る
春の星留袖を着て母逝きぬ
囀や結語に迷ふ四半時

犬ふぐり野路へ一番乗りの色
源泉へつづらの径や露の臺
吸物に浮く麩の五色雛の膳
入船に集まる鷗風光る
鳥帰る引き潮に乗る達磨船
池尻の膨らむ堤草萌ゆる
晴れ上がる空の点描花辛夷

ものの芽

岡野里子

砂浜に拾ふ波音さくら貝
日を欲りて伸びたる一枝梅真白
夜は夜の匂ひとなりぬ梅の花
恋猫や寺の暗きに茶筌塚
潮騒の遠より届き花ミモザ
一陣を残して林泉の鴨帰る
ものの芽や大地の柳を解くやうに
雪柳袋 小路の小暗がり
夕風に解く鹿子や白丁字
猿芸の客寄せ太鼓春一番
しばらくは風に委ねて雪柳
青空へ挙りて風の紫木蓮

瑞声

空つ風

黒滝志麻子

(顧問)

紅椿岬の荒き波頭
借景に巨岩おく庭亀の鳴く
野遊びや子等足早に帰り行く
春暁の一山ゆらぎ大太鼓
堂裏の菜の花明かり経洩るる
木曾谷を分け入る深さ木の芽晴
かつかつとブーツの少女うらけし
風車彩いろいろに風を呼ぶ

甲矢集

観梅

石黒興平

楯足して語部いよよ佳境なる
山祇の乗り下るかや雪解川
篋の奥の茶房や利久の忌
啓蟄の土盛る畝や黒々と
快晴や五感ゆさぶる春の風
身一杯使ひ鮎挿す鳩の湖
水温む疲れを知らぬ子らの声
観梅や野点の濃茶喫しつつ
白梅や野点の席の緋毛氈
幹割れも力のひとつ臥竜梅

紙雛

菅野日出子

救急車の近付く気配夜半の春
麻酔よりさめて窓打つ春しぐれ
回診の医師のやさしさ春ぬくし
病窓よりはるかな家並春夕焼
リハビリの若き看護師暖かし
娘よりベッドへ届く紙雛
連れだちて鳥はいづこへ春の暁
怪物めく窓のハツ手や春一番
転院のリハビリ医院春の雷
忘れぬし我が家の匂ひうらけし

ひつそりと

森清信子

山裾の目覚め促す笹子かな
薄氷や法の池面の引き締まり
神のなす浄化の業か春の雪
距離置きて座す喪の席や余寒なほ
ひつそりと野風に触れず露のたう
沢音に応へて挙り雑木の芽
啓蟄やむやみに痒き耳の奥
木立より朝の日矢差し蘆の角
少年の声まつすぐに木の芽晴
北窓開き新しき風とり込めり

乙矢集

配列は音順、月毎の循環



津軽三味

岡田史女

如月のうすき日差しや羅針盤
春北風や叩き鳴らせり津軽三味
昼すぎの風の強さやクロッカス
石工らの足投げ出せり春の昼
蒼天へひらききつたり白木蓮
園丁の二人は女性雪柳
(棹 杉山善信様)
友逝くや桜咲く日を待たずして

桜 鯛 太田良一

野の話 小田嶋野笛

石投げて別るる海や春愁
春風やネクタイ締めぬ首回り
穴道湖や霧に棹さす蜷舟
春眠や千の仏に千の石
ぬるま湯のランプの宿や亀の鳴く
わんぱくの眼は上に卒業歌
包丁のためらふ見目や桜鯛

鳩の踏む土やはらかや春来る
爪切るや庭より二月礼者来て
香をこぼすことを赦され梅月夜
初午の夜のスコッチ独り占め
白魚や霞ヶ浦の香を孕み
野の話してゐる春の炬燵かな
蹠跟と酔ひの歩みや朧影

小余綾の磯 高木邦雄

春 愁 池乗恵美子

たもとほる小余綾の磯初蝶来
金縷梅の垣の古民家梁太し
霧や仁王の瘤の土埃
夕さりの沖行く漁船灯のおぼろ
雛の宴酢の香ほんのり夕厨
つくばひや浮きては沈む落椿
天帝のこぼせし星か犬ふぐり

末黒野や初心へ返る道さがし
篋の風の隙間や匂鳥
春愁や黄昏長き湖の色
白梅や夜目に明るき二三輪
ことさらに青き一天梅真白
雛の間の残り香ぬくし妣の影
鱒東風太公望の竿撓り

雪解川 長尾タイ

露のたう 今村千年

のどけしや釣糸垂るる岩の鼻
水底に煌めく波紋水温む
一握り香走る芹の卵とじ
春雷や半熟卵皿の上
古民家の暗き灯しや享保雛
雪解川一步に怯む沈下橋
風光る投餌に走る鯉の水脈

庭隅のいつものところ露のたう
根気てふことは大事や臥竜梅
囀や緩び初める森の黙
ひとりよりふたりが楽し桃の酒
ありがたや屋根のひまより春の月
釣舟の揺蕩ふ湖や水の春
落柿舎へ抜ける野道や竹の秋

青炎集 森清堯選



横浜 片岡さか江

恵方目指し行く福あるを信じつつ
冴返る眠れる町を救急車

ものの芽もこもこ土を盛り上げて

黄砂降る車真白に染めあげて

初麻雀の初満貫や春うらら

満開の花の坂道リュック負ひ

横須賀 福田禎子

ある無しの風と遊びぬ花ミモザ

草萌ゆる大地に転ぶ犬二匹

若布刈舟浦曲の空の鳶の笛

果てし無き青き大空鳥帰る

初音かなもう一声を待つ山路

桜餅昔話に花咲かせ

横浜 山口登

梅東風や大宰府の空かくあらん

春闘や今は昔の労働歌

百態の自儘のひねり白子干

食卓の朝餉彩り三月菜

胡坐して猪口傾くる木の芽和

柳絮とぶ乗合舟の竿の先

大網白星 岡井マスマ

祥月や厨に庭の花ミモザ

粗板を組み干す小屋や雑木の芽

一花つつ言問ふやうや初蝶来

西空にふるさと二つ杉の花

桃の花うれしきときの涙かな

廃れ家の巣箱に気配ありにけり

横浜 梅田武

やはらかき妻の薄紅初ざくら

白れんの反りて深むる翳りかな

連翹や眠気さませる花明かり

青麦の一直線の若さかな

ぶつくりの腹へ酔味嗜や蛭鳥賊

踏青や玉子サンドにアメリカン

藤沢 宮澤靖子

春立つや土蔵の窓の半開き

鎖樋をあふれてをりぬ雪解水

雪解や錆の頭はのトタン屋根

春なれや目覚め初めたる花時計

春眠へおちゆく刹那逆らへず

春光や樹々の迫り出す園の池

横浜 市川夏子

切通しの水未だ硬く寒の明け

口程に動かぬ手足涅槃西風

夜を駆くる春一番や一人膳

訪ね来るつがひの鳥や芽吹く木木

茶柱の立つ朝春へ身をしづめ

土を鋤く等身大の春心

新潟 五味紘子

電線に鳥の音譜や深雪晴

紅梅や幼の一步踏み出して

アダージョのトレモロのやう雪霽

即席の泡立つ抹茶桜餅

たんぼばや信号待ちの歩道脇

跳躍の猫のパンチや石鱈玉

横浜 秋山文字子

笹鳴や忍者のやうに動く影

一句得るまでの苦楽や風生忌

すぐ起きると言ひつつ仮寝春炬燵

朝の気を吸つてつんつんつくしんぼ

心身の疲れ癒やすや春の月

道迷ひ知らぬ門前沈丁花

町田 伴秋草

雨降山笑ひ常より高く見ゆ

咲分けの梅情熱と理知の色

酒止めて九十九日や雛祭

春嵐制服の子の走り行く

もう少し生きやう遠き春の雲

春風に遊ぶびニール袋かな

耕 土 集 岡野 里子 選



尻上げて銀輪の列鳥雲に
春の月指差す空の静けさよ
白木蓮忘れをりたる誕生日
沈丁花幽かに迷ひくる香り
ただいまの声を待ちをり春灯

狭山 小林 友子

花ミモザ古きイタリア映画観て
年少さんの手を引く園児梅の里
迫り来る猫の襲撃宵節句
あたたかや大樹の幹へ耳あてて
春風や切りたての髪揺らめかし

川崎 木村 純子

永き日や人は孤独の大都会
霊園の梅の白さや青き空
野の川のかはる瀬音や水温む
菜の花ののぶる堤や色をまし
賑はへる三浦の河津桜かな

横浜 西 計郎

街角の華やぐ朝や枝垂梅
白波のたたみ来る浜春の風
啓蟄や旅の仕度をいそいそと
野天湯や春の一日の世捨て人
稜線に絡みたる彩春の暮

三浦 田中由紀子

球場の喚声飛ばし春疾風
春一番波三角に尖らせて
谷戸の道はや売切れの露の臺
啓蟄や心の虫の騒めきて
砂抜き浅蜷ささめく夜更かな

横浜 喜田 君江

プレリユード雨戸を揺らす春一番
下萌や舗装道路の継目より
腕白のそつと抜きたり雛の剣
匂ふかに蕾色づき沈丁花
せせらぎのほとりの小道芹青し

横浜 森川 享

啓蟄やすずめの遊ぶ休耕地
そよ風に耀ふ川面別れ霜
靴底の春野の匂ひ勝手口
恙なく娘退院春シヨール
天空へ向く指ほどの辛夷の芽

横浜 佐藤 勝代

三月の風は嫌ひよ目のかゆみ
草の芽や庭へ次つぎ雀ども
卒業や終の下校に肩ならべ
たそがれの無垢のはくれん際立てり
長閑なるとる火のゆらぐ煮豆かな

横浜 白居 澄子

春灯や我を待つ部屋の仄々と
木蓮の白の切り抜く空青し
宇宙への夢の続くや春の星
考妣の墓の近くて遠し彼岸入
花の門出て人生輝きぬ

横浜 久島しんの

黄昏の空の色濃し辛夷の芽
盆梅や鉢いつばいに苔なして
大好きなる薄手の器木の芽和
猫の子や玄関先で餌を待ち
春の鳥枝から枝へ移りけり

横浜 三浦千恵子

梅園に稚を背負子や若き父
ひしめきて風を集めて黄水仙
夕ぐれの露天温泉しだれ梅
風光る雑木も草も色めきて
春景色句帳に記すを論しみて

横浜 大山みさ子

春暖や綿雲を裂く日の光
紙雛や誰の作やら柳腰
ジーンズのおふくろ御膳皿の華
紅梅一枝剣山に紅き茎

横浜 伊藤 鴉

雛祭り青きリボンの孫来たる
沈丁花君が近くに居るやうな
うららかなや駅の通路の俳句展
連翹の光り眩しく道の端
ノリタケの揃ひの皿や独活サラダ

横浜 青山 隆男

物の芽や丸く余生を過ごしたく
春潮へ細き流木旅終ふ
雛飾る姫は十七おちやつびー
途中下車見知らぬ駅の桜餅
吟行の背押す川辺木の芽風

横浜 岩崎 藍